

早稲田大学教育学部2年・大瀧真生子(おおたき・まおこ)さん(21)

「安楽死という選択」(要旨)



「100歳時代プロジェクト」は、多くの人が100歳まで生きる社会を前提にしています。100歳まで寿命が延びるなんて素晴らしいと考える人が多いと思いますが、本当にそうでしょうか。果たして100歳まで生きながら自分らしさを失わないことが可能な人は一体どれぐらいいるのでしょうか。自分らしさ、そして自分の意思伝達手段を失った状態でも「生き続ける」ことは、本当に良いことなのでしょうか。

私は日本における安楽死の制度化を提案します。安楽死とは、患者自らが医者から処方された薬を自らの意思で服用し死を迎えるものです。

今後日本は、ますます厳しい状況に直面します。少子高齢化が加速し、社会保障費が国家予算の大半を占めるようになる中で、少子化対策も期待できません。その結果、私たちの世代は、施設に入るお金すらももらえないかわからない。定年後の人生において自分らしさを発揮できるような経済的余裕がないかもしれない。そのような状況の中で人生最期の選択肢に安楽死があってもよいのではないのでしょうか。医療の進歩により死を迎えるのが延びたとしても、病床に臥(ふ)し続け、認知症によって自らの意思伝達手段を失った状態になってまで生き続けたいとは思いません。また、寿命が延びるといっても、経済的に困窮し余裕のない人生の最期は望んでいません。

私は自分らしく生き、自分らしく人生の幕引きを図るという点で、安楽死という制度が、これからの日本にとって必要な選択肢だと考えます。